

パリで受けたいくつかの親切

定年後に始めた文学紀行の取材で、7月の初め『レ・ミゼラブル』の舞台フランスを訪れました。いつもは留守番役の妻も、今回は“花の都パリ“ということで同行、71歳と67歳のドン・キホーテと女サンチョ・パンサの“弥次喜多道中”的な旅となった次第です。宿は各地を回るための便利さを考慮し、パリ中心部オペラ地区の小さな三ツ星ホテルに決めました。



凱旋門

まずは街中で英語が意外に通じないのに驚き困惑しました。でもそうしたなか、たった4日間の滞在中にパリジャンから受けた親切に二度も胸を熱くしたのです。

パリ到着の初日のこと。夕方8時過ぎ、私たちは宿泊のホテルまで500メートルに満たないところで道に迷ってしまいました。パリの道路は碁盤形ではなく放射線状になっているものが多くて自分が居る場所の掌握が難しい。またどの建物も6、7階建ての同じ高さに統一されていて目安となる物を決めるのが難しいのです。

パリには外国人を狙ったスリが多いと聞いていました。暗くなると治安も心配になってきます。途方に暮れていると、たまたま私たちのいた道路に止めてあった自転車を取りに来た若いフランス人男性が声をかけてくれたのです。ホテルの番地を言うと、サッとポケットからスマートフォンを取り出した彼は、画面に近辺の地図を拡大し、5分ほどかけて念入りに調べてくれたのです。彼の詳しい説明と案内で私たちはなんとかホテルに戻ることができたのでした。



ユゴー文学記念館

翌日。パリ郊外にあるユゴー文学記念館を訪れようと地下鉄を利用した際のことです。乗り換えの駅がわからなくなってしまいました。どうしても方途が無くなり、ホームの椅子に座り新聞を読んでいた50代と思われるビジネスマン風の壮年に尋ねてみました。

髭のそりこみが素敵なムッシュです。しばらく考えていた彼はパッと立ちあがり、フランス語で何か言うと手招きで自分についてくるように指示を始めたのです。彼の言葉は1割程度しか理解できなかったですが、とにかくその「親切さ」についていきました。フランス語のわからない高齢の日本人にいくら説明しても難しいと思われたのでしょうか。彼は次の乗換駅まで一緒に電車に乗り、さらに着いた駅では郊外に出る路線の切符の購入まで試みてくれたのです。

しかもその時、切符販売機の調子が悪くフランス人の彼にしてもうまくいきません。やむを得ず20メートルほど離れた別の場所にある販売機に移りました。この販売機ではクレジットカードもOKだったのですが、今度はなぜか私のカード(VISA)を受け付けません。現金で料金は8ユーロ。でも紙幣は受け付けず硬貨のみ。私の財布には7ユーロの硬貨しかあ

りません。自分たちの後ろには他の利用者が列を作って並んでいます。これ以上、時間をかけるわけにはいきません。すると彼はとっさに自分の財布から 1 ユーロを出してプラスしたのです。こうしてやっと切符を購入、その後も私たちが電車に乗るホームまで同行してくれたのでした。

最初に声をかけてから 30 分余り。小さなビジネスバッグを抱えた氏は本来の自分の仕事もあったはずですが。私はときどき「お仕事なのに申し訳ありませんね」と英語で何回か声をかけてきたものの、あまりにも申し訳なく、立て替えてくれた 1 ユーロとお礼を含めて 10 ユーロ紙幣を手渡そうとしました。と、氏は笑顔で「ノー、ノー」と手を振り、そのまま立ち去ってしまったのです。私は「メルシー（ありがとうございます）！」とその後ろ姿に向かって心からの感謝の言葉を送るのが精いっぱいでした。

と、そのとき、妻が警告の声を発しました。

「気をつけた方がいいわよ。後ろに様子をうかがっている黒人がいるからね」

先ほど 10 ユーロを出そうと財布を手にした私を見ていたのかもしれませんが。私たちは急いで 10 メートルほどその場からホームを横に移動しました。そして、なんというタイミングなのでしょう！このときホームから次のような日本語のアナウンスが流れてきたのです。



セーヌ川の橋にかけられたカギの列。

盗難とは関係ないようですが・・・

「この辺はスリが多いですから持ち物には十分に注意をしてください！」

実は同じような内容の放送をパリ市内のいくつかの地下鉄ホームでも聞きました。国際都市パリにはさまざまな人種と色々な人が生活しています。言葉に尽くせないほど親切なパリ人がいると思えば、注意喚起の放送の対象になる人もいます。よくしてくれた二人とも名前は聞けませんでした。でも、こんな親切な人もパリにいるという事実の紹介と感謝のしるしとして、また何かの縁でフランスの関係者にこのことが伝わることを期待してこの欄で紹介させていただいた次第です。